1958 年ブリュッセル万博日本館の音楽

Music for the Japanese Pavilion of Expo 58 in Brussels

井上　さつき
INOUE Satsuki

Expo 58, also known as the 1958 Brussels World's Fair, was held in Brussels (Belgium) from 17 April to 19 October 1958. It was the first major World Expo registered under the Bureau International des Expositions (BIE) after World War II. The Japanese pavilion was designed by Japanese architect Kunio Maekawa in modernist style. Maekawa worked as an overall producer as well as in architectural design. The Japanese pavilion was awarded the exposition's Star of Gold. In order to realize his ideas, Maekawa collaborated with graphic designer Ryuichi Yamashiro, display designer Isamu Kenmochi, photographer Yoshio Watanabe, and composer-conductor Yuzo Toyama. This was the first time that music was considered to be an essential component of the overall design of the Japanese pavilion.

This paper examines the music for the Japanese pavilion of Expo 58 and seeks to clarify a new relationship between architecture and music.

1．はじめに

1958 年のブリュッセル万国博覧会は、第二次世界大戦終了後、最初に開催された大規模な国際博覧会である。日本はパビリオンの設計をモダニズム建築の旗手であった前川國男（1905-1986）が担当することになり、前川の主導で「日本人の手と機械」が日本館の展示テーマとされた。自然と建築との結びつきの美を巧みに表現した前川の設計は高く評価され、日本館は総合審査で 116 館中 9 位の金賞を獲得した。

展示については、グラフィック・デザインが山城隆一、展示設計が剣持勇、写真が渡辺義男、音楽構成が外山雄三の担当となっていた。ブリュッセル万博における日本の展示は、前川を中心とする各ジャンルの制作者たちが互いに共同しながら進めていったところに特徴がある。

本稿は、日本館の音楽に着目する。歴代の万博の日本館の建築において、音楽が展示の一部とし

て考えられたのはこれが初めてであった。本稿では、ブリュッセル万博の日本館を音楽面から再考し、前川國男がめざした、音楽を含めた総合的・統一的な展示表現の意味を考察する。

2．ブリュッセル万博の概要

1958 年ブリュッセル万国博覧会は、「科学文明とヒューマニズム」という基本テーマで、1958 年 4 月 17 日からベルギーの首都ブリュッセル市郊外で開催され、盛況のうちに同年 10 月 19 日に閉幕した。

ベルギーは 19 世紀半ば以来、小規模ではあるが、数多くの万博を開催し、都市作りに生かしてきた。最初に行われた万博は 1855 年のブリュッセル万博で、これは 1830 年の革命でベルギーがオランダから分離、独立してから 25 周年を祝うものだった。それ以来、ベルギーでは、25 年ごと、つまり、1880 年、1905 年、1930 年に独立記念の祝典が開催された。そのペースで行けば、次は 1955 年に独立 125 周年を祝う祝典が開催され、それに合わせて万博が開催される予定であったが、朝鮮戦争（1950-53）が起こったため、開催が 1958 年に延期され、場所も当初の予定地から 1935 年にブリュッセル万博の会場となったヘイゼル公園に変更された[1]。

1958 年ブリュッセル万博のプランは 1953 年 11 月パリの博覧会国際事務局によって正式に決定され、ベルギー政府は巨額の費用を投じて準備を開始した。翌 1954 年 3 月、ベルギー政府は同国が外交関係を結んでいた世界各国へ参加招請状を送り、それに対し 52 の国と国際機関が参加意志を表明した。各国は競ってパビリオンと展示内容の計画にとりかかった。

会場となったヘイゼル公園はベルギー王室所有の公園で、ベルギー政府委員会とブリュッセル市当局とが王室から借り受けて用地に当てた。全敷地の中央部にテーマタワーとなるアトミウムが建設され、それを中心に全敷地の半分が主催国ベルギーに宛てられ、残りの半分に国際機関と参加各国のパビリオンが建てられた。その敷地は参加各国の予算に比例して分割配合された（『国際建築』1958 年 8 月 , 39）。したがって、大きな予算を投じた国には大きな敷地が、予算が少ない国には小さな敷地が割り当てられたわけである。

3. 日本の参加

日本はベルギー政府から参加を要請されていたが、実際に決定をみたのは、1955 年 9 月 30 日であった。この日、閣議決定により参加が決まったのである。参加が要請されてから、すでに 1 年半が経過していた。同年 11 月、外務、通産、文部、建設、運輸の関係各省によって最初の打ち合わせ会が開かれ、これらの関係係官によって「ブラッセル万国博準備会」が設置され、そこで、日本館の規模、展示方針、催し物、建築家の選定などが検討された。

敷地 1000 坪、建坪 325 坪、「近代的趣向をもち、かつ、日本独自の伝統的美しさをもつパビリオ

[1] 1935 年ブリュッセル万博は、国際博覧会条約（1928）に基づいた最初の万国博覧会で、第二次世界大戦前、唯一の第一種一般博 (参加国に展示館建築の義務を課す) であった。この 1935 年ブリュッセル万博は、ベルギーの鉄道開通 100 年とコンゴ独立国建国 50 年を記念したもので、「民族を通じての平和」をテーマに開催された。

ンの建設」という基本線がこの準備会によって決められた。建築家の選定は、関係各省から推薦された建築家を投票によって選出し、最終的に、前川國男、丹下健三、板倉順三の 3 人が選ばれ、この順位によって依頼交渉が進められた（『工芸ニュース』1958 年 3・4 月号 , 6）。最初に依頼を受けた前川國男が承諾したため、彼が日本館設計者となることが正式に決定した。そして、建築及び内部展示の総括は、1956 年春、前川國男建築設計事務所に委託された（『国際建築』1958 年 8 月号 , 39）。建築だけなく、内部展示の総括を前川が引き受けたというところが重要である。

前川は現地の敷地の実地調査のためにベルギーに渡航し、一方、国内では準備連絡会が設置され、具体案の検討が進められた。1956 年 2 月、博覧会参加事業の実施に関する業務は一元的に日本貿易振興会（JETRO 当時は海外貿易振興会）に委託されることになり、3 月ブリュッセルにおいて日本館の建設に関する工事請負契約を締結、ただちに建築工事に着手し、1958 年 3 月に竣工した（日本貿易振興会 1959, 4）。

参加計画を進めるに当たっては、「設計者の意図を常に尊重しながら協議が進められた」という。これは「従来、この種の計画が、関係者の多いことから、設計者自身の創意を出し尽くし得ないウラミのあった」（『工芸ニュース』1958 年 3・4 月号 , 7）ことを踏まえてのことで、結果として、前川國男の全体的な意図が建物自体の設計だけでなく、総合的に生かされることとなった。

前川は 1958 年の開幕後に開かれた座談会で、準備期間が足りなかったことを嘆いた。確かに、1954 年 3 月にベルギーから公式の招聘状が来たにもかかわらず、閣議で参加が決定されるまで 1 年半、さらに、その後も時間がかかり、前川の事務所に委託されたのは 1956 年春である。「お金が足りないならば、せめて時間的な余裕でも与えてくれればよかったんじゃないかと思うんだけれども、その 2 年なり 3 年なりの躊躇が、あとで出品物を選定するときに、非常に支障になったということですね」と前川は座談会で述べている（『国際建築』1958 年 8 月号 , 45）。

実際、日本館の建設に宛てられた予算は少なかった。博覧会前年、前川建築事務所の三上祐三[2]は日本館の予算について、他国と比べて、次のように述べている（『工芸ニュース』1957 年 6 月号 , 12）。

> 敷地 7,500 坪、総予算 50 億円の円形の米国館と、ほぼ同様の敷地に 150 億円の巨費を投ずるといわれる長方形のソ連館がアラブ連合館を中にはさんで対立するあたりが外国館群の中心部である。ここからやや外れて、公園の広大な芝生が王室の離宮の庭に続くあたり、美しい針葉樹の杜にからませた丘に南を限られる約 1,000 坪ほどのゆるやかな傾斜地が日本館の敷地となっている。この環境の美しさを活かして展示場、レストラン、事務棟から成る約 500 坪の日本館を建てることがわれわれに与えられた課題であった。総予算は約 15,000 万円、約 1/2 が日本館の建設費にあてられる。

[2] 三上祐三（1931-2020）はこの後、シドニー・オペラハウスの設計に従事し、さらに、洗足学園前田ホールや、東急文化村オーチャードホールを設計した。

米国とソ連がしのぎを削っていた時代である。敷地も予算も、日本館とは文字通り桁違いであった。予算も少なく、期日も迫っている中で、前川事務所は知恵を絞った。

> 敷地全体を一つの庭として考えるところから、この計画はスタートした。[……] 伝統と環境に培われた建築と自然とのつながりの美しさを、スティールとコンクリートという近代技術による大屋根の下に展開することによって、われわれはこの博覧会のテーマへの一つの解答を試みたいとねがっている。

三上は続けて、内部展示についての計画を次のように述べる。

> 日本館の内部展示計画については [……] 過去のすぐれた文化的伝統をもつ「日本人の手」が機械文明をとり入れつつどのような成果をその環境と生活の上にあげているか、また将来人類の文化に貢献しうるいかなる可能性をもっているかを、上記のような建築的空間のなかにくりひろげてゆきたいという計画が現在進められている。展示物、壁面構成、照明、音楽、家具などによる内部展示と、庭園、建築のもつ空間構成との一体となった協働的成果によって日本館の統一された印象をかたちづくること、これがわれわれの念願である。（下線は引用者による）

このように、当初の計画から、音楽が内部展示に組み入れられていたことが分かる。

4．日本館の建築

前川國男による日本館の全体の形は水平に広がった平屋建てで、やや天井の低くなった中心から左右に屋根が傾斜している。建物の中心に据えられた打ち放しのコンクリートの柱が屋根の鉄骨を支えている（図１）。

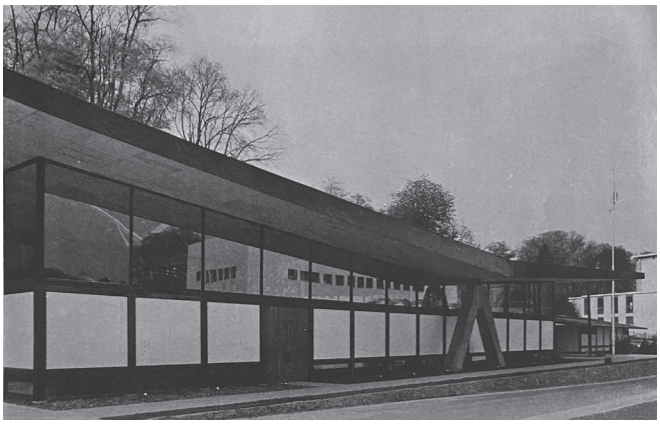

図１　1958 年ブリュッセル万国博覧会　日本館
前川國男設計（『国際建築』1958 年 8 月号より転載）

デザインはシンプルで、スチールとコンクリートという素材を使って、開放的な造りの日本住居を表現する。自然と建築との結びつきの美を表すために、日本館全体を一つの庭として、既存の大きな立ち木を中心に、水の流れ、池、庭石、草を配して、日本的空間を構成した。庭園用の庭石だけは京都の貴船、賀茂、鞍馬などから運んだが、日本館はすべて現地産の材料で作られた。建物の中央にも中庭を配置することで、観客の動線は、壁伝いに進んで展示を見て行けば、自然に館内を一周して出口に抜けられるようになっていた。

・総合プロデューサーとしての前川

上述の三上の文章からも分かるように、前川は、準備段階から、建物だけでなく、外側も内部の展示も、すべてトータルで考えた。日本館の「日本人の手と機械」というメインテーマ自体、前川が作ったものであった。

前川事務所でブリュッセル万博を担当していたのは、建築・雨宮亮平、構造・木村俊彦、内部展示・三上祐三の 3 名であった。前川國男が日本館の総合プロデューサーとして、いかに熱心に関わったかについて、三上は次のように思い出を書いている（前川國男建築設計事務所 OB 会有志 2006, 59-60）。

> ［彼は］日本館の建築、庭園、内部展示の企画と設計に非常な情熱を傾けた。その活動範囲は通常の建築設計の領域をはるかに超えて、メインテーマの設定から、在日中の英国詩人エドマンド・ブランデンに依頼した美しいスクリプトの構成、新進デザイナー山城隆一を起用した壁面のグラフィック・デザイン、それに写真の渡辺義雄、インテリアの剣持勇ら当代一流の専門家の協力を得て、日本館の全体構想から個々の展示物の選択に至るまでを統括し、大胆かつ細心にプロデュースしていった。その指揮ぶりはまことに水際立っていて、助手として傍らから見ていても胸がすくようだった。所管官庁の通商産業省、外務省、文部省などの担当官たちとの討論でも、正しいと信じたことでは頑として一歩も譲らなかった。

この三上の回想の中では音楽が出てこないが、展示については、グラフィック・デザインが山城隆一、展示設計が剣持勇、写真が渡辺義雄、場内音楽の作曲及び編曲が外山雄三（1931-）の担当となっていた。山本佐恵が述べるように、ブリュッセル万博の日本館の展示は、前川を中心とする各ジャンルの制作者たちが互いに協同しながら進めていったところに特徴があり、こうした方法はそれまでの日本の万博展示にはないやり方だった（山本 2011, 63）。

本稿で注目したいのは、その展示の中に、前川が当初から音楽を組み込んでいたことである。歴代の万博の日本館で、音楽が展示の一部として認識され、担当者が加わったのはこれが初めてであった。

・展示のシナリオ

日本館のテーマ「日本人の手と機械」が決まってから、中の筋書きが考えられた。建築の工事の期間が非常に切迫していたため、内容を決める前に建物の方を先行せざるを得なかった。前川は、「テーマが決まってプログラムができて出品する内容をきめてしまってから、建物をそれによって考える方が本筋ではないかと、いまでもそれを考えているんだけれども、それができなかった」（『国際建築』1958 年 8 月号 , 45）と述懐している。

そのシナリオの作成と出品物の選定は並行して行われた。出品物選定委員は「通産省、産工試の委員、日本館設計者、民間識者」であったが（『工芸ニュース』1958 年 3・4 月号 , 2）、前川自身はその選定に必ずしも満足してはいなかった（『国際建築』1958 年 8 月号 , 54-55）。

展示の骨子となるプログラムは以下のとおりである（『工芸ニュース』1958 年 3・4 月号 , 8）。

「日本人の手と機械」

博覧会におけるパビリオンは、国際見本市などにおける商品展示と趣を異にすることは云うまでもないが、とかく商品の羅列式に終るのが、これまでの例であった。しかし、「技術文明とヒューマニズム」のテーマを与えられていること、そして、遠隔の地にある日本の印象を強く人々に植えつけるということは大きな課題である。結局、設計者は、このテーマを展開して「日本人の手と機械」—la Main Nipponne et la Machine というテーマを設定、日本人の手の優秀性を誇示することに問題をしぼり、これに一貫したストーリーを与えることにした。すなわち、全体を「歴史」「産業」「生活」の３部に大別して構成し、テーマ「日本人の手と機械」を語らせることにした。

第１部「歴史」では、極東の島国日本の国土・環境の中で培われ生きてきた日本人の手による歴史的遺産を中心に展示し、遂に戦争によってすべてを失ってしまう戦前の日本を表現する。

第２部「産業」は現代の日本である。戦争による破壊の中からたくましく復興にのりだした「働く手」を象徴的に、そして再び高い技術水準をとりもどした「理知の手」を世界的に誇り得る製品の実物展示を中心に構成して、日本人の手と機械のたくみな結合を示す。

第３部「生活」では、日本人の手が機械文明と結びつきながらも、現代の日本人の生活の中に新しい伝統を仕立ててゆく姿を描くのがねらいであったが、実情は適切な例にきわめてとぼしく、結局、伝統のクラフトマンシップによる製品の展示の中に、日本人の生活感情を訴えることにした。

こうして、このシナリオと出品物に沿って、展示の準備が進められた。

5．日本館の音楽

・前川國男と音楽

このように、前川の構想の中には、当初から音楽が入っていた。前川の音楽好きは有名だった。彼は東京帝国大学工学部建築学科を 1928 年に卒業すると、ただちにヨーロッパに渡り、伯父の佐藤尚武駐仏大使を頼ってパリに住み、建築家ル・コルビュジェ（1887-1965）のアトリエで約 2 年間働いた。そのときには、家の近くのサル・プレイエルに足しげく通っていた。「［パリで］ほかのものはともかく、音楽だけは楽しんだね。ぼくは伯父の家に居候していたけれど、そのすぐそばにプレイエルの音楽堂があって、ショパンとドビュッシーと大ホールと 3 つのオーディトリアムがあって、ふらっと行けば、どこかで何かをやってるわけだよ。こんないい音楽が、こんなに安く気軽に聴けるのかと、ぼくはもう嬉しくてしょうがなかったね」と前川は語っている（前川 1981, 46）。その後も彼はオペラやコンサートにしばしば足を運び、特にオペラには目がなかった。戦後、前川は代表作の一つ、神奈川県立図書館・音楽堂（1954 完成）を建て、ブリュッセル万博当時は、上野の東京文化会館の基本設計中であり、音楽ホールとも縁が深かった。

日本館の音楽について、前川自身は次のように語っている（『国際建築』1958 年 8 月号 , 47）。

> ［展示が］一部と二部と三部とあるので、適当なバックグラウンド・ミュージックを別々にやりたいと考えていた。それで NHK の外山雄三君に頼んでバックグラウンド･ミュージックを編曲してもらったんです。第一部は伝統的な日本の古典音楽ですね――雅楽とかお能の鼓とか、そういうものを主にしたもの。第二部は現代日本の、モダンミュージックだな、あれを主にして、第三部はフォークローリック的な感じのもの――民謡とか、まりつき歌とか子守唄とか、そういうものを主力にまとめてもらって、現場で流しているわけです。

・外山雄三

日本館の音楽を任された外山雄三は指揮者・作曲家であるが、東京音楽学校で作曲を学び、当時は NHK 交響楽団の指揮研究員を務めていた。ブリュッセル万博の場内音楽の仕事は、外山によれば、前川建築事務所の三上祐三が外山の小学校の 1 年先輩だったことから依頼されたもので、内容については、「三上祐三氏が音楽についても詳しい人だったので、三上さんの意見を伺いながら仕事をしました」という。外山はこの仕事を終わってすぐにヨーロッパに留学したが、ブリュッセル万博には行っていない[3]。

外山雄三自身は、万博が開催される直前、日本館の音楽に関して以下のように語っている（『工芸ニュース』1958 年 3・4 月号 , 31）。

[3] 外山雄三氏からの電子メールによる。

数年前、上野でルーブル美術展が開かれたとき、かすかなクラブサンの響きが古典の清澄な旋律を場内に流していて非常に印象的だったことが忘れられません。そういう風な、何気ない、それでいて視覚的な展示品そのものの印象をも強め、さらに日本のすがたの何分の一かでも感じとってもらえるようにと欲張った考えではじめたのが、この日本館場内音楽作製という仕事でした。

展示品が大体３部に分けられるところから、場内に１種類の音楽を流しっ放しにすることは避けたい考えで、はじめから３部分のものを作るつもりでしたが、このプラン決定には「月並みである」という非難を覚悟すべく、いくらか勇気が必要でした。

第１部　歴史　この部分では伝統的な音楽、あるいは伝統ということにこだわらなくとも、ともかく古い音楽という意味で、雅楽と能楽のはやしの部分を、適当に編集して用いることにしました。現在のわれわれ日本人の耳は特殊な人、よほど年輩の方を除いてはそんなに日本の伝統音楽に対して特別な反応を起しません。これは欧米の人々と全く同じとは言えないにしても、ややそれに近い状態で音響を受取るということだと思いますので、われわれがきいて「サワリ」だと思われるところを選んでひとつながりの構成を試みました。

第２部　近代工業　全く新しい日本の若いエネルギーを示す一面として現代作品の、すぐれた作品でよい演奏のレコードまたはテープが保存されているものの中から数曲をとりました。作曲者は尾高尚忠、林光、入野義郎、黛敏郎、芥川也寸志、諸井誠、間宮芳生の諸氏です。このすべてが管弦楽曲であり、この部分のダイナミックな展示品とひとつの緊張関係を生みだすことを期待しております。

第３部　日本の四季　素直にオリジナルなわらべうたを約 20 曲、児童合唱団用に編曲して演奏し、その曲の間には、祭ばやしや波の音、鳥の声などの自然音も取入れるはずです。

さて以上で「場内」音楽は全部のはずですがこの他に、テンプラだかスキヤキだかを食べさせるレストランがあるときいては、ここにもひとつ鳴らしたくなって、民謡の旋律 32 種を慎重にえらび、いわば非常にバタ臭く、ムード風にアレンジして 20 名たらずの室内オーケストラで演奏しました。実は私を含めて編曲スタッフ 4 名が最も力を入れたのはこの部分で、これほど多数の民謡を、これほど本格的にかつ良心的にアレンジしたのははじめてだろうと自負しております。

そして最後に開館閉館の際に使用する「君が代」をということになりますが、既成の編曲はどうも最上のものとは言えないところから全く新しく編曲してみました。

以上のような仕事を、何事にも要領の悪い私がともかくすこしずつ進めて行かれたのは、JETRO、通産省、ソニー株式会社、NHK、その他たくさんの方々からの限りない御助力を頂いた故であることを記して感謝の印といたします。

外山雄三のこの記事の書きぶりから、執筆当時、音楽全体はまだ完成していなかったことが分かる。一方、この記事と同じ号の 11, 13 ページでは、音楽について、次のような言及も見られる。

日本館の「内部に入ると、静かに雅楽の流れる歴史の都である」。この第 1 部の最後には「ヒロシマの被災写真が戦前の日本に終止符をうつかのように象徴的にかかげられ」、その前面に「あたかも過去の日本の冥福を祈るかのように」興福寺仏頭（模造）が置かれている（図 2）。第 2 部「産業」は「復興」と「技術」の 2 部に分けられ、中央の重ダンプトラックただ一つが「戦争による破壊から再びたくましく建設にのりだした日本人」を象徴する。技術のセクションでは、日本人が再び高い技術水準をとりもどしたことが語られ、「背景音楽として流される電子音楽が、更にこの部の性格を強調するように計画されている」。（下線は引用者）

図 2　1958 年ブリュッセル万国博覧会日本館
第 1 部「歴史」から第 2 部にかけて
Wouter Hagens, CC BY-SA 3.0
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Expo58_building_Japan_inside.jpg

なお、万博開始後に刊行された『国際建築』の特集記事では、日本館について、建物の「仕上」の項目として、鉄骨や屋根、ホール天井、木部、ホール内部、床などの使用部材の表記の次に、「音楽」の項目があり、「雅楽・能・現代作曲家のミュジック・コンクレ［ママ］、民謡、わらべ歌。そのためのテープレコーダー及びハイファイ拡声器」と書かれていることが注目される（『国際建築』1958 年 8 月号 , 42）。

当時、日本でもすでに、ミュージック・コンクレートや電子音楽など、電子音響を使った音楽（電子音響音楽）の制作が始まっており、NHK 電子音楽スタジオではさまざまな試みが行われていた。外山雄三が実際にブリュッセル万博の日本館で流した音楽については、上記に挙げた以外の資料が残っていないため、実際に使われた曲の同定は困難である。特に、第 2 部の音楽について、外山は「管

弦楽曲」とひとくくりにしているが、電子音響音楽も使われた可能性は否定できない。

実際に音楽を担当した外山雄三の記述に沿って、1958 年ブリュッセル万博日本館の展示物と場内音楽の関係をまとめてみると、表 1 のようになっている。このほかに、地続きで建てられた日本レストランのために、室内オーケストラによる民謡編曲が行われたわけである。場内音楽は日本で録音・編集され、現地では会場に備え付けられたスピーカーから流された。

表 1 ：1958 年ブリュッセル万博日本館の展示と音楽 [4]

			展示物	主なパネル	音楽
第 1 部	**歴史**	1	受付	テーマカラー（紫、朱、金色）、テーマ写真、説明文、染色パネル（縄文、茶碗、能衣装、水、矢立）富嶽之図（鉄斎筆）日本列島（航空写真）ヒロシマ（被災写真）	**雅楽と能楽のはやしの部分**
		2	はにわ　縄文土器複製		
		3	青銅器		
		4	正倉院御物複製		
		5	陶磁器		
		6	漆器		
		7	刀剣		
		8	興福寺仏頭複製		
第 2 部	**工業**	9	重ダンプトラック	炭坑夫、説明文、テーマ写真、テーマカラー、溶鉱炉、発電機の内部、ダム建設工事、造船、造船所、変電所、ニコン F1.1 レンズ正面、キャノン F1.2 レンズ断面、テーマ写真、自動車工場、紡績機、発電子切削、精密作業、	**現代音楽（管弦楽曲）** 尾高尚忠、林光、入野義郎、黛敏郎、芥川也寸志、諸井誠、間宮芳生の作品 ＊電子音響音楽が使用された可能性もある
		10	光学ガラス塊		
		11	各種レンズ		
		12	各種写真機・撮影機		
		13	各種顕微鏡		
		14	簡易相似型電子計算機		
		15	可搬操返し型電子計算機		
		16	パラメトロンコンバーター		
		17	電子管半導体類		
		18	小型電子顕微鏡		
		19	中型電子顕微鏡		
		20	放射線測定器		
		21	閃絡点標定器		
		22	精紡機		
		23	繊維製品（工業製品）		
第 3 部	**生活**	24	各地陶磁器	説明文、「て」の字のパネル（スクリーン・プロセス）、子供たち、テーマカラー	**わらべうた（児童合唱）**
		25	各地漆器		
		26	郷土人形玩具		
		27	日本間		
		28	木工具		
		29	繊維製品（伝統製品）		
		30	ラウンジ		
		31	インフォメーション		

[4]『工芸ニュース』1958 年 3・4 月号と『国際建築』1958 年 8 月号から作成。第 2 部については「産業」と「工業」の両方の表記が見られる。

6. 万博開幕

1958 年のブリュッセル万国博覧会は 4 月 17 日に開幕した。日本館は現地で監督をした前川事務所の雨宮亮平（建築担当）、木村俊彦（構造担当）の奮闘により、2 月に完成していた。しかし、開会当日に完成していたパビリオンは、日本館、西ドイツ館、アメリカ館、ソ連館、その他数館あっただけで、フランス館、イタリア館、スペイン館、アラブ館などは特に遅かった。しかし、ブリュッセル万博自体は開会一か月間で予想を上回る 300 万人の入場者を集め、その後も人気は衰えず、10 月 19 日までの会期中、延べ 4,150 万人の入場者があった。日本館は外国館エリアの外れにあったが、それでも、入場者の 1 割から 1 割 5 分ほど、約 500 万人が訪れたと推定される（兼井 1959,19）。

・日本館の評価

日本館は、参加したパビリオンの中でもたいへん好評で、審査において、審査対象となった 116 館中 9 位という高評価を得て、数少ない金星賞を授与された。『1958 年ブリュッセル万国博覧会報告書』（以下、『報告書』と略記）では「他館と比較して極めて少ない経費をもって小規模な建築や展示を行った日本館が、このような上位の賞を獲得したことは、いかにその質が優秀であったかを示すものであると云えよう」と誇らしげに記述している（日本貿易振興会 1959, 206）。

では、具体的には日本館の何が評価されたのか、ここで、『報告書』を基に、この「審査」について少し掘り下げてみよう。

・パビリオンの審査

各パビリオンの審査は、展示品の個別審査に引き続き、8 月 25 日から約 20 日間にわたって実施された「展示総合審査」であった。この総合審査の採点基準は、第一に、本博覧会のテーマをいかに体現しているかということで、具体的には「褒賞授与に関する特別規定」第 38 条にあるように、

1．その展示の一般教育的価値　40%
2．その展示の芸術的価値及び独創性　30%
3．その展示の社会性具現度　30%

となっており、採点は 20 点満点で、点数に応じて、次の 3 種の褒賞が与えられた。

1．金星賞　18 点～ 20 点
2．銀星賞　16 点～
3．銅星賞　14 点～

審査員委員会は、各国館事務局員または大使館文化担当者 10 名、美術団体または美術館関係者 7 名、教育関係者 6 名、建築家または室内設計家 4 名、その他 12 名、合計 39 名をもって構成され、委員

長としてベルギーの E. Langui（本博覧会国際美術部門実施委員会事務総長）、副委員長としてオランダ、イギリス、フランス、ソ連、アメリカの各審査員 1 名ずつが選出された。日本の審査員は日本館事務局員である雨宮亮平（前川建築設計事務所）に委嘱された。

審査対象となった 116 館のうち、金星賞を得た 18 点以上のパビリオンは 9 館、銀星賞を得た 16 点以上のパビリオンは 23 館、銅星賞を得た 14 点以上のパビリオンは 47 館、以下は賞なしとなった。

総合審査結果表のうち、金星賞と銀星賞のパビリオンを表にしたものを挙げておこう（表 2）。日本はギリギリで金星賞を得たことが分かる。なお、審査基準からも分かるように、一般教育的価値が重視されたことから、万博審査で金星賞となったパビリオンが建築的にも評価されたというわけではなかった。この表では、英国の『アーキテクチュラル・レビュー』誌が 1958 年 9 月号で組んだ万博特集の中で、「6 つの優れたパビリオン」に選ばれたものにマル印をつけたが、金星賞を得たパビリオンで選ばれたのは西ドイツ館と日本館だけであることが分かる。前川國男の日本館は展示全体としても、建築的にも、西ドイツ館と並んで高い評価を受けたのである。なお、ブリュッセル万博は、審査・褒賞制と出展物売却制が機能した最後の万博となった。次のモントリオール万博では褒賞が停止され、出展物売却も停止され、現代万博への運営システムの転換が行われることになる（市川 2020, 510-513）。

一位となったチェコスロバキア館については、前川も内容の充実ぶりを高く評価し、出品物が、芸術品、重工業品、軽工業品、とバランスがとれて、精選した品物が並んでいると語った（『国際建築』1958 年 8 月号 , 51）。彼は、日本館の出品物の選定に納得がいかなかったのである。

ちなみに、ベルギーの植民地のパビリオンであるコンゴ館やルアンダ＝ウルンディ館が万博の審査で日本よりも上位の点数を得ていることにも留意すべきだろう。これら植民地の展示は支配者側のベルギーの視点から紹介されており、ベルギーが植民地の人々を見世物的に「展示」したものとして批判を浴びたことでも知られている（五月女 2020, 249）。悪名高い「人間動物園」はこのブリュッセル万博をもって万博の舞台から姿を消した。ベルギー領コンゴはコンゴ共和国として 1960 年に独立、ルアンダ＝ウルンディはルワンダとブルンジの独立により 1962 年に消滅することになる。

表 2：1958 年ブリュッセル万博のパビリオンの審査[5]

順位	館　名	得点	賞	英建築雑誌で評価された 6 館
1	チェコスロバキア館	18.72	金星	
2	ベルギー土木館	18.37		
3	イギリス政府館	18.32		
4	西ドイツ館	18.28		○
5	アメリカ館	18.28		
6	コンゴおよびルアンダ・ウルンディ館	18.26		
7	オーストリア館	18.06		
8	ベルギー国際美術館	18.06		
9	日本館	18.02		○
10	オランダ館	17.99	銀星	○
11	ベルギー電気館	17.96		
12	ベルギー農業・園芸・家畜館	17.87		
13	ソ連館	17.59		
14	ブラジル館	17.50		
15	ポルトガル館	17.42		
16	フランス館	17.37		
17	イスラエル館	17.30		
18	ベルギー都市・田園館	17.22		
19	フィンランド館	17.17		
20	ユーゴスラビア館	17.12		○
21	メキシコ館	17.00		
22	ベルギー国際科学館	16.96		
23	トルコ館	16.68		
24	ベネズエラ館	16.52		
25	ベルギー保険館	16.33		
26	スペイン館	16.31		○
27	コンゴ農業館	16.29		
28	欧州石炭鉄鋼共同体館	16.23		
29	イタリア観光館	16.22		
30	イタリア技術史館	16.15		
31	モロッコ館	16.15		
32	カナダ館	16.04		
番外	スイス館	―		○

[5]『1958 年ブリュッセル万国博覧会報告書』および *Architectural Review* から作成

・日本館の音楽に対する現地評

日本館の評判は良かったが、音楽についてはどのように評価されたのだろうか。『ル・プープル』（ベルギー社会党日刊紙）1958 年 5 月 23 日付では、日本館の音楽について次のように述べられている（『建築文化』1958 年 10 月号 , 40）。

> われわれが光明と平静にみちたこの館を称揚して過した間中、われわれは珍らしい奇怪な音楽に伴われていた。日本の発明した装置で放送される日本の音楽である。古い年代の底から出てくる音楽であり魂や心に語りかける音楽である。

ここでは、「珍しい奇怪な音楽」が何を指して述べているのか不明だが、音楽には着目している。

一方、万博終了後に出版された公式報告書では、日本館について 6 頁割かれているが、その中で音楽に関する記述が次のように 2 か所見られる。「第 1 部では、BGM は古代の伝統的な音楽が、日本とヨーロッパの楽器を使って演奏されているが、ここ（第 2 部）では児童合唱が若さの飛翔を喚起させる」（*Mémorial 3*　1959, 119）。それから、「第 3 部の『今日と明日の生活』と題された部分の入り口で、近代的なアレンジが混じった伝統的な音楽が私たちを迎える」という内容である（*Mémorial 3*　1959, 120）。

ここでは、新聞記事よりはくわしく説明されているが、第 1 部、第 2 部、第 3 部で流れていたはずの音楽とは一致しない部分もある。ヨーロッパの楽器を使って演奏されたという「古代の伝統的な音楽」が実は第 2 部の現代音楽だったのではないかとも考えられる。なお、第 3 部の入り口で聞かれたという「近代的なアレンジが混じった伝統的な音楽」というのは、もともと、外山が日本レストランで流すために作った民謡編曲であった可能性もある。日本館の係員の報告にも、「館内いたるところに配置した日本風の籐製丸椅子や縁台風のベンチに」「1 － 2 時間も腰を下してじっと場内音楽（日本の民謡をオーケストラに編曲したもの）に耳を傾け」ていた人がいたという記述があり（兼井 1959, 20）、その音楽が場内に響いていたとも考えられる。

不思議なのは、第 2 部「工業（産業）」のところで流されたはずの日本の現代音楽について特定できる評が見当たらないことである。外山が挙げているのは尾高尚忠、林光、入野義郎、黛敏郎、芥川也寸志、諸井誠、間宮芳生の管弦楽作品であるが、先述したように、電子音響音楽が使われた可能性も否定できない。この万博では、「実験音楽週間」が開かれただけでなく、電子音響音楽を主体にしたパビリオン、フィリップス館が作られ、話題を呼んでいたのである。

7．伝説のフィリップス館

1958 年のブリュッセル万博は「世界各国から集った建築家たちが、腕によりをかけて多くの展示館を建て」たが（高階 1961,11）、中でも異彩を放っていたのが、オランダの電気機器製造会社フィリップスがル・コルビュジェに建築設計を依頼したフィリップス館である（図 3）。

図 3　1958 年ブリュッセル万国博覧会フィリップス館
By Wouter Hagens, CC BY-SA 3.0,
https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=4596780

フィリップス社は 1891 年にオランダのアイントフォーヘンの電球会社としてスタートし、1920 年代の終わりからラジオの分野に進出し、その後も通信、レコードの分野で一大コングロマリットを築いていた。そのフィリップス社は 1956 年、建築家のル・コルビュジェに 1958 年ブリュッセル万博のパビリオンの建築設計を依頼した。内部空間の演出を行う目的で作曲を担当することになったのが、エドガー・ヴァレーズであった。コルビュジェは当時、インドのチャンディーガルの都市計画が佳境に入っていたため、助手のヤニス・クセナキスに実質的な差配を任せた。ギリシア系フランス人で、建築家であると同時に作曲家でもあったクセナキスはパビリオンの構造に双曲放物面（PH）を用いたデザインを用意した。PH は連続した直線の変化で構成される曲面で、フィリップス館はこれをもとに構成されたほか、クセナキス自身のミュジック・コンクレート作品《コンクレ PH》（1958）の作曲にも用いられた。クセナキスの作品は 2 分ほどで、建物の入退場の際に用いられた。

このユニークな形態のパビリオンの内壁には 325 個のツイーター（高音用スピーカー）が埋め込まれ、底面には 25 個のウーファー（低音用スピーカー）が設置され、これらが 12 通りの「音響の道」を形成した（沼野 2019, 397）。壁面にはル・コルビュジェが構成した 480 種の映像からなるフィルムが投影された。この企画は当初から「ポエム･エレクトリック」と呼ばれ、ヴァレーズはミュジック・コンクレート作品《ポエム･エレクトリック》（1958）を作曲した。この作品は映像とともに、スピーカーから 1 日 40 回流された。

フィリップス館の特徴は、通常の企業パビリオンとは異なり、商品の展示を一切行わないかわりに、空間を提示したことであった。もちろん、演奏や照明、映写の設備はすべてフィリップスの製品が

使われていた。日本貿易振興会が刊行した『1958 年ブリュッセル万国博覧会報告書』は、フィリップス館について、以下のように記述している（日本貿易振興会 1959,38）。

> オランダの著名な電気機器製造会社フィリップスの館である。建築はフランスのコルビュジェ（LeCorbusier）(sic) で、窓のない奇妙な建物である。（高さ 66 尺）。「エレクトロニックスの詩」というテーマで展示品はほとんどない。入場すると、奇矯な電子音楽が聞え、壁には、アブストラクト風の絵が映り、ふしぎな雰囲気になる。これらの演奏や照明・映写の設備にはすべてフィリップスの製品が使用されている。会場中で最も風変りな館である。

「奇妙な建物」、「奇矯な電子音楽」という部分に、筆者の正直な感想が現れている。建築家ル・コルビュジェの名前は出てくるが、作曲家エドガー・ヴァレーズの名前は出てこない。「展示品はほとんどない」ということは、万国博覧会を見本市と捉える傾向の強かった日本からすれば、おおいに驚くことだっただろう[6]。

フィリップス館は 5 月 2 日から公開され、9 月末までのおよそ 5 か月間の会期中、150 万人の観客がこれを鑑賞した。会議後、フィリップス館については保存運動も起こったが、結局、万博の規則に従って解体された。

・前川國男とフィリップス館

前川國男はル・コルビュジェの設計したフィリップス館にも注目していた。座談会で、フィリップス館について語っているのは、前川よりはむしろ助手の木村俊彦だが、以下のように語っている。木村は日本館の建築担当だった弟子である（『国際建築』 1958 年 8 月号 , 51-52）。

> 木村　オランダの一部に、コルビュジェの設計したフィリップス館がありました。
> 浜口　どんなのですか。
> 木村　パイプを角のようにたてて、その間にワイヤーをはって、はじめの計画ではプレキャストになっていたんですけれども、実際には現場でコンクリート打っておりました。
> 前川　ぼくがコルビュジェの事務所で設計見ていたときは、コンクリートのプレキャストでやるといっていたのを見たんだけれども……。
> 浜口　大きさはどれくらい。
> 木村　そうですね。天井の一番高いところは……。
> 浜口　７，８メートルですか。

[6] この万博に対する意識のギャップは、モントリオール万博での日本館の展示に対して、大きな批判を呼ぶことになる。

前川　もっとあるね。10 メートルくらいあるんじゃないかな。10 メートルはないね、8 メートルくらいだね。

木村　そこへ 4 ～ 50 人くらいずつに切って、人を入れるんです。天井が外形のままですから、しずんでいるんですね。そのしずんでいるところに、ゴリラの顔だとか、蛮人の生活だとか、いろんな景色みたいなものもありましたし、都会なら、すごい勢いで自動車が走っているところとかを映写して、その伴奏に電子音楽をやっているんですよ。天井中にスピーカーがあっちこっちについておりまして、電子音楽がグルグル・グルグル部屋ン中をかけまわるんですよ。出てきた人をつかめて、おもしろかったかといったら、（笑声）何もわからなかったといっておりました。

（中略）

木村　ぼくはおもしろかったけれども、やはり何もわからなかったです。入るときはいちおう期待をもってはいったんですから……。

フィリップス館で試みられた構造物と音楽、映像を総合的な一つの展示として示す、斬新なものであった。なお、インパクトの強かったフィリップス館であるが、先述したパビリオンのコンクールには名前が挙がっていない。企業パビリオンであるため、このコンクールが対象とする「その構成が特に博覧会のテーマに合っている綜合展示」（日本万国博覧会協会 1965-67, vol.1, 146）という原則に合致しなかったのであろう [7]。

・実験音楽

1958 年ブリュッセル万博では、それまでの万博同様、従来型のさまざまなコンサートが活発に行われた。その一方で、ベルギー・ラジオ放送国立協会により、実験音楽国際週間が 10 月 5 日から 10 日にかけて開催された、電子音響音楽の分野の重要作がコンサートで演奏された。このイベントのために、ブリュッセルには新しい音楽の問題に関心のある、多くの作曲家、演奏家、批評家、技術者たちが集った。フィリップス館のル・コルビュジェとクセナキス、ヴァレーズによる協同はまさしく時代を先取りしたものであった。

8. おわりに―その後の前川國男と博覧会パビリオンの音楽

1958 年ブリュッセル万博の日本館の建築・展示構成の企画・設計で高い評価を得た前川國男は、その続く 1964 ～ 1965 年のニューヨーク世界博覧会でも日本館の建設・展示構成の企画・設計を依頼された（日本貿易振興会 1966, 87）。日本館は政府館としての 1 号館、民間館としての 2 号館、およびレストランの 3 号館から構成され、1 号館と 2 号館の設計管理は前川事務所が担当した。1 号館

[7] フィリップス社のホームページには、賞を得たと書かれている。
https://www.philips.com/a-w/about/our-history.html（2022 年 1 月 17 日閲覧）

は流政之の彫刻による石壁のまわりに堀をめぐらした異色の建物で、その芸術性が話題になったが、前川は作曲を新たに黛敏郎に依頼したことが注目される。前川にとって音楽は展示を構成する重要な要素であった。さらに、前川國男が手がけた博覧会パビリオンと音楽とのつながりは、1970 年の大阪万博の鉄鋼館へと続くのだが、これらの博覧会パビリオンと音楽については稿を改めて論じたい。

本稿執筆に当たっては、外山雄三氏にお世話になりました。心から御礼申し上げます。

主要参考文献

Architectural Review 1958（9）
Mémorial 3 1959, *Les participations étrangères et belges, Exposition universelle et internationale de Bruxelles,* Bruxelles : Commissariat général de l'exposition '58

『工芸ニュース』 1957 年 6 月号、1958 年 3・4 月号
『国際建築』 1958 年 8 月号
市川文彦　2020 「近代博から現代博への運営システム転換」『万博学―万国博覧会という、世界を把握する方法』京都：思文閣出版
兼井連　1959 「一九五八年ブリュッセル万国博覧会　日本館あれこれ」『海外市場』1959 年 4 月号：17-20
五月女賢司　2020 「一九七〇年大阪万博の基本理念」『万博学―万国博覧会という、世界を把握する方法』京都：思文閣出版
高階秀爾　1961 「ブリュッセル万国博覧会」『文学散歩』1961 年 9 月号：8-11
寺尾藍子　2014 「1950 年代日本のモダンデザイン：海外展におけるデザイン表現について」『デザイン理論』63：33-48
日本万国博覧会協会　1965-67 『1958 年ブリュッセル万国博覧会公式記録　第 1 巻 - 第 5 巻・第 8 巻』大阪：日本万国博覧会協会
日本貿易振興会　1959 『1958 年ブリュッセル万国博覧会報告書』東京：日本貿易振興会
日本貿易振興会　1966 『ニューヨーク世界博覧会参加報告書』東京：日本貿易振興会
沼野雄司　2019 『エドガー・ヴァレーズ：孤独な射手の肖像』東京：春秋社
前川國男建築設計事務所 OB 会有志　2006 『前川國男・弟子たちは語る』東京：建築資料研究社
山本佐恵　2011 「1958 年ブリュッセル万博日本館の展示における山城隆一のデザイン活動」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』58：62-63

執筆者

井上　さつき（音楽学部作曲専攻音楽学コース　教授）